と、独立した在地首長権を求める筑紫君磐井との間で懐疑的な関係が形成され、新羅征討に係り磐井が掌握する軍隊の動員要請に端を発しついに継体21（527）年に乱が勃発する。古代史上特筆される磐井の乱の激戦地が後代になって筑後国府を設置する「御井郡」であったことは、その後の地方経営スタイルと統括戦略に多大な影響を与えたと推察できる。大和政権による支配形態の変化は、磐井が敗れた翌年の葛子による糟屋屯倉献上〔継体22（528）年〕、那津官家の「修造」と筑豊肥に分散していた屯倉の穀の那津之口への「聚建」〔宣化元（536）年〕、穂波・鎌・我鹿など北・中部九州８箇所の屯倉設置〔安閑２（535）年〕などに反映され、地方の蜂起や勢力拡大防止を意図した。一方、福岡平野側の那津官家比定地である比恵・那珂遺跡に接した東光寺剣塚古墳の被葬者は官家の経営に関与した首長の可能性が高く、大和政権との緊密な関係を有していた肥後系首長層の墓制である石屋形が、この古墳のほか６世紀中頃の北部九州の有力首長墳（王塚古墳・富永古墳・弘化谷古墳・童男山古墳）へ一斉に設置され拠点を抑える。また、東光寺剣塚古墳の近傍には三角縁神獣鏡を持つ那珂八幡古墳（纏向型前方後円墳）も存在し、大和政権にとってこの地域は前代から内政・対外戦略の直轄的な場所であった。こうして磐井の乱は、中央が地方首長を認知することで同盟関係を保ち得た地方の間接的支配という以前の在り方から、直接支配・従属関係へとシステムの転換をもたらすとともに、対内外の危機管理の必要性を痛感する充分な動機になり、ひいてはこのことが後代の神籠石式山城やその他の官司を含む軍事拠点の占地に影響を与えたと考えられる。６世紀中頃の施策以後、遅くとも推古17（609）年には、不測の事態に備えるために大宰が常駐する官衙である筑紫大宰の位置を那津官家や東光寺剣塚古墳が所在する那津口に選定するに至る。

以上のような遺跡の動態には、初期大和政権期から磐井の乱に至るまでの地方経営スタイルと、その結果内戦を生じさせた経験則を踏まえた中央集権化に向けての九州在地勢力対策の変質が如実に顕れると同時に、以降の両筑平野の取扱いを決定づけた。このような両筑平野の内外的評価や意義は律令制の成立期に至っても劇的に変化することはなかった。そうした流れの中で朝倉遷宮直前には軍事機能を果たす神籠石式山城や筑後国府前身官衙などの官司の整備が始まり、百済救援と斉明天皇西下、続く敗戦を受けた対外戦略の重点化という政策転換を事由に、古来以来の二つの要衝である両筑平野・福岡平野を繋ぐ二日市狭隘部の玄界灘寄り、つまり大和政権が最終的に拠点に選定した那津官家寄りに軍事、外交、そして西海道の行政を総管する「大宰府」が設置されることになった。

３．神籠石式山城築造の目的とその年代

神籠石式山城は、有明海側に開けた筑後平野・佐賀平野を始点とし、官道もしくは両筑平野の北縁を画す山地の谷筋から豊前へ抜ける古道沿いに集中して配置されている。始点では筑後川下流域の佐賀平野側に帯隈山城、筑後平野側に女山城が対峙し、両筑平野南西端の開口部には高良山城が占地する。そして、両筑平野の北端と東端それぞれの頂部には阿志岐城と杷木城が築かれ、この両城を結ぶ平野北限の山地を超えた豊前地域に唐原・御所ヶ谷・鹿毛馬の各山城を配置する。雷山城など玄界灘側にも山城を築くが福岡平野北半部では未確認である。このように有明海側に力点を置きつつも二日市狭隘部を含む両筑平野から豊前を経て畿内を終点とする導線は朝鮮式山城に通じる。

神籠石式山城の築造目的と時期に関しては諸説あるが、７世紀前半～中頃にかけて朝倉宮を防衛する目的で築造もしくは再整備され、大宰府に筑紫大宰が移設されたことを受け、大宰府防衛網への転換が図られた結果廃城となったという見解がある。一方、白村江敗戦後、７世紀中頃から８世紀前半にかけて仮想敵国とされる新羅との緊張関係が推移する中で、有明海を想定した大宰府防衛網の拡大により築造され、朝鮮式山城が先行したとする立場がある。有力な上記二説はいずれも目的を対外政策に求める。しかしながら例えば大野城と「大宰府」の関係と同様、高良山城と筑後国府前身官衙、杷木城と朝倉宮という山城と官衙の関連性を無視することはできず、これらの山城が両筑平野の要所を抑えている事実は、古墳時代以来の九州経営＝対在地勢力対策的側面を有していたことを示唆する。

ところで、白村江敗戦以前に築造された立場をとる説の築造年代に関しては、『日本書紀』の「繕修城柵断塞山川之兆」〔斉明６（660）年〕の記述を神籠石式山城に対応させ、百済滅亡直後の一年間〔斉明７（661）年〕で築造を完了したとみる指摘がある。この説については、朝鮮式山城と神籠石式山城が唯一見かけ上で対になる阿志岐城と基肄城の在り方が参考になる。白村江敗戦後に南からの侵攻に備えた「大宰府」の守りを目的に築城された基肄城だが、敗戦直前段階で玄界灘から朝倉宮への

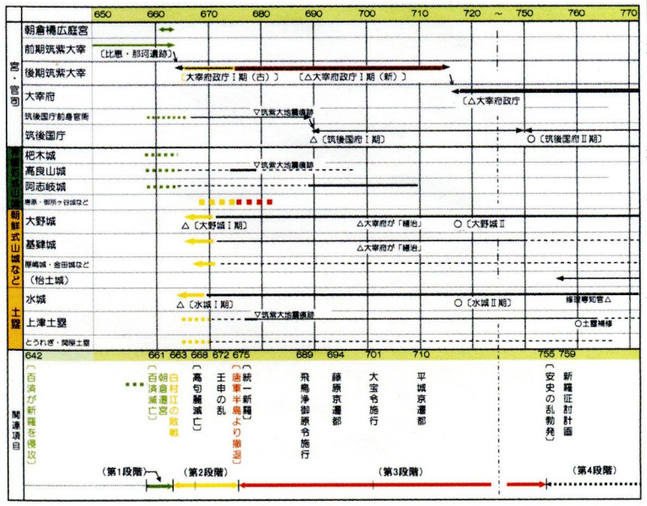
侵攻を想定した場合に、要衝の二日市狭隘部の特に宮寄りの地峡東側に山城が配備されていなかったとは考え難く、すでにこの時点では阿志岐城を配置していたことになり齟齬はない。しかし一方で一年間という施工期間については、百済滅亡の報告を９月に受けてから西下までの僅か半年程度の間に瀬戸内海沿岸地域を含めた神籠石式山城の整備を完了しなければならず疑問も残る。防衛施設を整えた後に遷宮を行ったと仮定すれば、百済滅亡を待たずして神籠石式山城の整備に着手されたことになろう。

さて、考古学から築造年代を定めるには、先行する遺構との先後関係、出土遺物、石材加工技術や山城の構造などに拠ることとなるが、いずれの諸説も決定的な確証を得ていない現状である。韓半島に目を転じると、我が国における二つのタイプの山城の系譜を考える上での参考になる事例もある。韓国忠清南道木川土城・稷山蛇山城などは土塁基底部の石列が基本的に二段積みであるが、神籠石式山城にみられる列石前面の柱穴列に加え、列石の切れ目（＝土塁外面の盛土中）にも柱列が存在する。近年、大野城の調査でも土塁に埋め込まれた柱列や石積み、外被盛土など百済山城や神籠石式山城に類する構造も明らかになっている。また、両タイプの山城の違いとされていた礎石建物も唐原城や御所ヶ谷城で確認されている。いずれにせよ、百済山城と神籠石式山城・朝鮮式山城の築造が時期的に近接する可能性は高く、今後、発掘成果がでている鬼ノ城など瀬戸内海沿岸の例も含めて詳細な比較研究を進めていく必要がある。

以上のように神籠石式山城は、中央集権化に向けた国家施策である内政・外交両面の戦略的意図のもとに前史を踏まえ総合的な防衛計画が策定され、遅くとも百済の劣勢を意識した段階では杷木城・高良山城・阿志岐城築造に着手し、朝倉遷宮〔斉明７（661）年〕時点で最低限の防衛網敷設が完了していたと考える。白村江敗戦時の非常時でさえも優先順位を考慮しつつ段階的な整備を行っていることを考慮すると、それに準じる事態下で築城を進めた神籠石式山城の場合、斉明天皇西下時に両筑平野以外の山城は未着手もしくは未完成であったと推察できる。同時に神籠石式山城の築造が百済滅亡という極度に切迫した事態の築城でない事は列石の入念な加工法からも窺えよう。そして、白村江敗戦を契機とした政策転換期（＝筑紫大宰の移駐）以降、大野城・基肄城を鏑矢に天智６（667）年までは史料にみえる朝鮮式山城を築造する。神籠石式山城の下限の決定には苦慮するが、立地・構造・工法の画一性を重視すると、朝鮮式山城築城の記事が途絶えて以降の早い段階で当初の配置プランに沿って朝鮮式山城を補完するように築造を再開したと考えておきたい。つまり大陸の動向を主として睨みつつも、地方経営的側面も見据えた軍備基本設計にもとづき、前代からの度重なる百済の救援要請に応え半島に渡った際に会得した百済山城の築城技術を礎にして施設整備を進める狭間で、白村江敗戦を契機とする朝鮮式山城が介在するという解釈である。

４．北部九州防衛網の整備過程

ところで北部九州を防衛拠点においた７世紀中頃以降の対外的な背景は、百済をめぐる半島情勢が悪化した斉明朝〔第１段階〕、白村江敗戦後の天智朝～天武４（675）年〔第２段階〕、唐軍の半島からの撤退と統一新羅の建国により敗戦に直接的に起因する脅威が去った天武５年以降〔第３段階〕の各段階に分けることができる。前項までの記述を踏まえ、以下に官司と他の防衛施設を絡めた整備過程を試案として復元する。



〔第１段階〕唐・新羅の百済侵攻～百済滅亡～朝倉遷宮～白村江開戦までの、派兵に伴うリスクである唐・新羅の侵攻に対する備えと、在地労働力動員を手段とした地方首長勢力伸長抑止を睨んだ二面性を有した段階。百済滅亡（扶余陥落）による遷宮後は宮を防衛。この段階かその前段で神籠石式山城の築造に着手。

構成施設：那津の前期筑紫大宰（対玄界灘側）、阿志岐城、筑後国府前身官衙＋高良山城（対有明海側）、杷木城